

**冬期講習日程** 対象 中1～新高3生  
冬期講習に関するお問い合わせ 03-5371-5487

Aターム **12/20(木)～12/23(日)**  
Bターム **12/26(水)～12/29(土)**  
Cターム **1/4(金)～1/7(月)**

**説明会  
入室テスト**

会場: グノーブル新宿本館  
説明会10:00～ 入室テスト11:30～  
説明会対象者:  
中1～大学受験生、保護者  
入室テスト対象者:  
中1～高2生(新高3生)

11/ 3	(祝・土) 説テ
11/ 11	(日) テ
11/ 18	(日) 説テ
11/ 23	(祝・金) テ
11/ 25	(日) テ

※ 説 = 説明会、テ = 入室テスト

## 2012年 大学受験合格実績 第6期 在籍346名

東大各科類69名

理科Ⅰ類	17名
理科Ⅱ類	12名
理科Ⅲ類	1名
文科Ⅰ類	14名
文科Ⅱ類	14名
文科Ⅲ類	11名

**東京大**  
**69名****HARVARD大 1名**  
**国公立慶医**  
**42名**

医学部医学科118名

東京医科歯科大(医)	6名
京都大(医)	1名
千葉大(医)	3名
筑波大(医)	1名
横浜市立大(医)	1名
金沢大(医)	2名他

慶應大(医)	4名
東京慈恵医大(医)	12名
順天堂大(医)	13名
日本医大(医)	12名
昭和大(医)	11名他

※ 国公立大医計38名  
※ 私立大医計80名

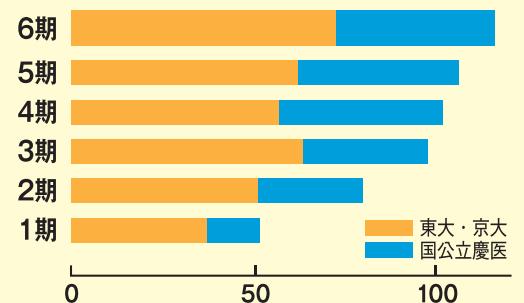
国公立大165名

京都大	4名
一橋大	18名
東工大	10名
東外大	7名他

**慶應大**  
**157名****早稲田大**  
**154名****上智大**  
**45名**

**東大・京大  
+  
国公立慶医  
合格実績**

**6期在籍346名中115名**  
5期在籍311名中**105名**  
4期在籍307名中**102名**  
3期在籍271名中 **99名**  
2期在籍232名中 **79名**  
1期在籍187名中 **52名**

**GnoTube****Gnobleを動画で体験！**

どんな先生がいるんだろう?  
どんな授業をするんだろう?  
グノーブルは何が違うんだろう?

[www.gnoble.com/gt/](http://www.gnoble.com/gt/)

## 大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ | 月曜～金曜15:30～21:00/土曜14:00～21:00/日曜休館(説明会・テスト日除く)  
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL 03-5371-5487 FAX 03-5371-5488

一 知の力を活かせる人に

**Gnoble**大学受験  
グノーブルグノーブルにアクセス。東大にアクセス。  
[www.gnoble.co.jp](http://www.gnoble.co.jp)  
新宿・渋谷・お茶の水

# Gnolet

グノレット

vol.9  
2012年9月発行

中学生・高校生・保護者の方へ

Doubt grows  
with knowledge.

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

(Johann Wolfgang von Goethe, 1749年-1832年)

ドイツの詩人、劇作家、小説家、自然学者、政治家、法律家。



## 保護者座談会2012

大学受験は、子育ての最終局面。  
その良きパートナーとして、  
グノーブルを選びました。

## 勉強最前線

～いま、教室で～  
高1数学 a 1クラス編 数学科 田部井 希一

## ティーチャーズ・ボイス

道具(文法)を磨く。たくさん書く。添削を受ける。  
グノーブルを利用して英語の発信力を高めてほしい。  
英語科 本原 昭彦

## 超解説 グノーブル用語辞典

**Gnoble**  
大学受験 グノーブル

Gnobleは、私たちの理念をこめた造語です。  
Gnoは「知」、bleは「力」をあらわします。  
Gnoは、knowを意味するギリシア語、bleは、ableに由来します。  
oは「知識のつながり」、「人のつながり」も意味しています。

# 大学受験は、子育ての最終局面。 その良きパートナーとして、 グノーブルを選びました。

ご出席いただいたお母さま：上から、永井さま 松葉さま 吉田さま



2012年度の保護者座談会は、東大に現役合格を果たした、**永井秀くん**（文II・開成出身）、**松葉勇志くん**（文I・聖光学院出身）、そして千葉大医学部に現役合格された**吉田薰くん**（駒場東邦出身）のお母様をお招きしてお話をうかがいました。大学受験までの長い道のりの中で、お母様方はグノーブルをどう見ていらしたのか。また受験生の親として、お子さんとどんな関わり方をされたのか。とても貴重なお話でした。（取材・文 吉村高廣）

## 子どもたちを変えた“グノーブル効果”とは？

**吉田：**グノーブルの授業では医事関係の英文も頻繁に扱っていただいたようなんです。うちの子もそんな授業に刺激を受けて、普通であれば日本の新聞や書物から得るような知識を、原文のまま知る楽しさを実感するようになったようです。

英文の情報源を自分の守備範囲していくときの成長は、私の目にも見える大きな変化でした。「こんなことがあるんだよ」と私に活き活きと話してくれたこともあって、そんな姿に私自身も嬉しくなりました。それに伴って、医学部を目指すモチベーションをどんどん高めていくことができたようです。

以前は、いちいち外からの働きかけで気がつかれ、それからようやく動いていたような幼い子だったんですが、中1からこちらにお世話になっているうちに、徐々に主体的に勉強に取り組めるようになり、心も成長したように感じています。

**松葉：**うちの子も受験を通して精神的に強くなったと思いますが、その背景にあるのは、こちらで強化していただいた英語に対する自信ではなかったかと思います。

もともと、中学の頃から英語は得意だったのですが、それが、高1からこちらにお世話になって、相当いい点が取れるようになりました。学校には英語でつまずいている生徒さんが多いたようですが、おかげで息子は英語の応用力がついて、それが全ての教科にいい影響を与えていったのだと思います。

小さい頃は、あれどうしよう、これどうしよう、と必ず親のところに来ていた子だったんですけれど、学校の定期考査の計画も自分で立てて、表彰状がいただける成績を絶対取ると決め、黙々とやっていました。

志望科類もそうとして、私は直前期まで、同じ東大を目指すにしても合格点のボーダーが低いところを勧めていました。でも本人は、「いや、僕は絶対文Iに行く」と頑として譲りませんでしたし、勉強方法にしても私が仕入れてきた情報には全く耳を貸さず、「自分で予定を立ててやるから、一切口を出さないで」と言われてしまいました。

受験期に私がしたことといえば、風邪をひかないように配慮することと、決まった時間に食事を食べられるようにしておくくらいのことです。

**永井：**中学に入ると子どもは自立、親は子離れの時期と言われるわけですが、私自身は子離れがなかなかできなかつたんです。

ついつい口を出してしまっては嫌がられ、それでもまた何かを言ってしまい、結果的には「ああ、言わなければ良かったな」と後味の悪い思いをすることが随分ありました。上の子＊が女の子でしたので、息子との接し方には少しとまどったところがあったんですね。

高3の夏に息子がスランプになって私も頭を抱えてしまったことがあります。突然、受験に向かう意欲が失せてしまった状態になって、家族では何もできることができなくて、思い切って中山先生にご相談したところ、日を置かずして息子に声をかけてくださったんです。

先生は、息子を子ども扱いせず、一人の人間として対等に、きちんと向き合ってくださったようです。お話の内容までは詳しく存じません。ただ、その日を境にモチベーションをとり戻し、その姿勢を最後まで貫き通して受験に向かって行きました。

学力の向上はもちろんですが、グノーブルでは息子も私も、精神的な面でも大変お世話になりました。親として心掛けていたのは、結局、あたたかい食事と寝床を用意することだけでした。親が口を出していいことはないと思いました。

\*永井彩さん グノーブル4期生（桜蔭→東大文II）

## 塾選びの指標は、保護者ネットワーク活用？

**永井：**娘と息子では全く違いました。女子校と男子校の違いなのか、それとも校風なのか、桜蔭と開成では受験に対する保護者の関わり方は全然違いました。

桜蔭ではお母さん方がかなり熱心に情報収集をされていて、塾の話もよく出ました。一方、開成では保護者会などでも塾のことが話題になるようなことはほとんどありませんでした。

娘の時は、桜蔭の保護者ネットワークを活用した私主導の塾選びでグノーブルに入れました。娘はグノーブルがとても気に入って成績も上がったので、それで息子にも勧めました。

ところが男子校というのはとてもオープンで、生徒同士でものすごく情報共有がなされているんです。息子はグノーブルの評判も知っていましたが、東大専門塾にも興味を示して、中学のうちに両方に通ってみて、最終的にグノーブルを選んだのは息子本人です。必ずしも私の勧めだけではなく、あくまでも本人の選択で塾を決めたんです。

**松葉：**うちの息子はどんな環境であっても馴染んでしまうところがあったので、信頼できるところを私が選ばなければと考えていました。ところが聖光学院は、比較的塾に通う生徒の少ない学校だったんです。お母さんの方の間で、塾の話が出ることもありありませんでしたから、私がインターネットなどで調べて中山先生の評判を知りました。

「絶対この先生に息子を預けたい」との思いを強くしていましたが、中学生の間は、学校が横浜で住まいが千葉ということもありますし、新宿で途中下車して塾に通うには無理があるかなと思い、高校生になるまで塾に入れるのを待ちました。

ただ、高1で入ってからも、当時中山先生は高2と高3を受け持たれていたので、すぐに担当していただけたわけではありませんでした。息子には日頃から、将来、先生が担当の上位クラスに入るようにと言っていたが、息子は息子で、担当していただいた秋好先生の授業がとても気に入って、順調に力をつけていたようでした。

それから、息子が高2の頃にこんなことがあります。



東大文科I類1年（聖光学院出身）  
松葉勇志くんのお母様

聖光学院の懇親会でその年に卒業された保護者の方たちから受験体験を伺いました。ある方が、「うちの子は中学の時にとてもいい塾に出会って英語が武器になりました」とおっしゃったんです。後でその方に塾の名前をお尋ねしたらグノーブルでした。

「私の選択は間違っていました」と改めて確信しました。

国語の行村先生の評判を聞きつけて息子に勧めたのも実は私でした。うちの子は東大を受けたいという割には、意外とのんきに構えていましたので、私が情報を与えないエンジンがかからないところがありました。与える情報はかなりきっちり精査して、「そこから頑張るのはあなただからね」という感じで勧めました。

**吉田：**うちの子は駒東でしたが、中学に入ってから学校生

活が楽しくて楽しくて、全く勉強しなくなってしまったんです。本当に全く勉強しなかったんです。危機感もなく、もちろん塾にも行こうとしません。最初は黙って見ていましたが、私もさすがに「これはまずい」と思い、数学が強いと評判のあった塾に半ば強制的に入れました。

本人も渋々通っていたのですが、基礎を教えてくれずにはいきなり応用だということで挫折。で、インターネットであちこち調べていたら中山先生がグノーブルという塾を立ち上げるという情報をつかみ、さっそく説明会に足を運んだところ、「この塾は素晴らしい！」と響くものがありました。

出来たばかりの塾でしたが、中1だった息子も数学の縦田先生が気に入り、グノーブルには喜んで通いはじめました。その出会いが本当にありがたかったです。ですから、子どもが心底信頼できる先生を求めて奔走するのは、やはり親の役目かと思います。

私は学校で保護者の集まりがある度にグノーブルを勧めていましたが、開成と同じように駒東も生徒同士のネットワークが非常に発達しています。学年が上がるにつれて親のネットワークというよりも子どもたちの情報交換でグノーブルを選ぶ駒東生が増えたようです。受験学年のときにはずいぶん多くの駒東生がグノーブルに通っていたんじゃないでしょうか。

## グノーブルで出会った先生方の印象は？

**吉田：**息子は小学生の頃から算数好きで、そこそこ成績も良かったんです。縦田先生はうまく息子をほめて伸ばしてくださいましたが、私から見ると、数学の力をつけていただけのことにはもちろん感謝しておりますが、勉強に前向きに取り組む姿勢を築いていただけたことを何よりありがたく思っています。

**松葉：**うちの場合は英語の秋好先生がスタートでしたが、それがすごく良かったようです。息子にしてみれば、親から言われて顔見知りが1人もいない塾に入るというのは不安もあったと思います。やはり先生に声をかけていただけることが励みになるはずです。この時期に、お若くて優しい秋好先生に1年間お世話になったことで、英語を学んでいく上での基礎や心構えを身につけられて、自分なりのペースがつかめたようです。

また、中山先生に英語を習ったことで、息子は言語にものすごく興味を持つようになりました。大学に入ってからも外国語を学ぶことに全く抵抗がないようで、第二外国語に積極的に取り組んでいます。それもここで英語を学んだことの大好きな産物でした。

大学受験に特化した単なる「受験英語」ではなく、「使える英語」を標榜されている中山先生の指導方針は、息子にも伝えていただけたように感じています。

**永井：**やはり最初にお世話になった先生の印象は強いものがあるようとして、とくに娘は、グノーブルに入ったばかりの頃に添削していただいたプリントもまだ全部とっています。ある時それを見返して「こんなにひどい答案なのに、縦田先生はいつでも優しくコメントをしてくださった」と言ってましたね。

**松葉**：国語の行村先生にも高3で大変お世話になりました。息子は現代文がとても苦手だったのですが、行村先生はいつも励ましてくださり、「君は絶対合格するから大丈夫」とおっしゃってくださいました。最後の最後まで、ファックスで添削していただいていましたが、行村先生は必ず「この答案なら大丈夫」というようなコメントを書いてください、直前にも不安になることなく勉強に取り組めていたようです。

先生には気持ちの面でも支えていただけましたが、現代文への正しい取り組み方を明快に指導していただけて、それがすごく役立ったと息子が言っていました。

**永井**：この機会に中山先生にぜひともお礼を申し上げたいことがあります。

東大入試2日目の英語のこと。娘の時も「中山先生に会えるまで受験会場に入らない」と言って握手をしていただきましたが、今年から、駒場は立ち入り禁止になり以前のようにお会いできる雰囲気ではなかったんですね。

ところが駅の改札口で中山先生が待っていて息子に声をかけてください、握手をしてくださったと聞いています。それで本人も落ち着いて試験に臨むことができたとのことです。それを息子から聞いて、親としても心から有難く思いました。

## 歴史の浅いグノーブルを不安に思ったことは？

**永井**：ありませんでした。

娘がお世話になっていたので先生方の人間性には全幅の信頼を置いていましたし、教材が素晴らしいということを知っていました。常に新しい話題を盛り込んだオリジナルな教材で、子どもたちも楽しんで勉強に取り組んでいたようです。それにしても、それを常に作り続けるには先生方のご苦労は計り知れないものがあったと思います。

東大の入試問題は知識の量だけでは対応できない部分があると思います。必ずどこかで教養が必要になってくるものです。グノーブルで英語を学んで教養も身につき、国語の現代文の読み方も変わったと子どもたちは話していました。

**松葉**：私も全くありませんでした。

授業の中身は分かりませんが、今も永井さんがおっしゃられたように、教材が常に旬な話題を扱っていて「面白い」と息子が話していました。

言葉は生き物ですので、子どもたちが美味しいと思える内容のものでないと学習効果が薄くなってしまうと思うんです。今は特に世の中の動きが速いですから次々に世界から新しい話題が生まれますし、新しい英語の表現も生まれていると思います。英語の基礎力とともに教養も身につけていただけ、好奇心をも満たしていただけるという、そうした視点から見ても「グノーブルに任せておけば英語は大丈夫」と思っていました。

模試でも英語は常に高得点が取れていたようですし、直前期には英語はそこそこに、苦手科目に打ち始めたのも助かりました。

**吉田**：たとえ最初は親が決めたとしても、子どもが嫌だと思ったら塾を変えますよね。嫌々塾に通っていても授業に

身が入らないでしょうし、成績だって伸びることはあります。英語の長文をしっかり読みこなす力を身につけることは、実は大変なことだと思います。グノーブルに通うことで息子は近道させてもらったなど、親としては思っています。数学も順調に伸びていただけたと感謝しています。

**永井**：男の子は結構頑固なところがあるのか、親が言ってもなかなか聞かないですね。最初にも申し上げましたが、私が何か口を出すとお互いに嫌な気分になるので（笑）。吉田さんがおっしゃる通り、子ども自身が塾に行くのを楽しみにするということは大きなポイントかと思います。

## 受験生の親として、塾や先生に求めるものは？

**吉田**：これはとても難しいところなんですけれど、個人指導のように1対1で「自分の子どもだけ見ていてくれればいい」とも私は思わないんです。と申しますのも、息子は数学の授業の時に自分と同じくらいの成績の生徒さんをターゲットにして、小テストの点数がその生徒さんより下だった時は、「ああ、もっと努力しなくちゃいけない」と思っていたそなんです。

そういう切磋琢磨が子どもたちを強くしますし、学力を向上させる鍵にもなると思います。そのためには、集団の中で学んだ方が刺激もあり、自分の位置も見えてきます。

ただし、あまり大きく学力差が開きすぎていては意味がなくなります。同じくらいの力を持った生徒たちがしのぎを削り合えるような環境で、互いに意識し合える人数であることが大事なことだと思います。そうした意味でもグノーブルは、息子にとって最良の塾でした。

**松葉**：子どもが自分のことを客観的に見ることができて、強みや弱みをよく分かっていればいいんですが、なかなかそこまで冷静に自分を分析できるものではないと思います。

常に生徒を見てくださり、しっかり指摘していただける先生の存在が大事だと思いますし、それがいい塾の第一条件だと思います。そこがしっかりしていれば、家での復習の仕方も変わってきます。勉強は復習が大事だと思いますが、復習を効率的にやるためにには、先生の的確なアドバイスが必要です。

うちの場合は、英語の要約が課題だと指摘をいたいでいたので、直前に東大の過去問をやる時もそこに重点を置いていたようです。ウィークポイントを明確にしていただけるのは受験勉強を進める上で大事なことじゃないでしょうか。



千葉大医学部1年（駒東出身）  
吉田薫くんのお母様

**永井**：うちの息子は、モチベーションをグノーブルで上げていただいたことに感謝しています。英語がすごく好きになったようですが、それは常に近くで先生が見ていてくださったり、声をかけてくださったりという先生のお人柄も大きな要素でしょうが、授業や教材自体に子どもたちを引き込むものがあったからだと思っています。

「やらなきゃ」と思って勉強するのと、「やりたい」と思って取り組むのでは、まるで違うはずです。上の娘も、息子も、グノーブルの英語には本当に真剣に取り組んでいました。私には具体的なことは分かりませんが、グノーブルには、子どもたちが「勉強したい」と思える授業があったのだと思います。

## 母親として、子どもとどう向き合ってきたか？

**永井**：息子が「自立したい」と思った時に、私自身は「まだ関わっていたい」と思ったんですが、それをすごく嫌がられ、いろいろ考えさせられました。

たとえば、私が息子の部屋の片付けをやってしまい、大切な教材がどこかにいってしまった。息子からは「足だけは引っ張らないでくれ」としかられました。

大学に入るのをサポートすることもひと仕事なのですが、一人の人間としてきちんと自立させてあげる親の役目について、いろいろと自問自答していました。

**松葉**：大学を決めるというのは、18歳にして大きな決断をしなくてはならないことです。いま私が反省しているのは、本人の気持ちはずっと文Iからぶれていなかったにもかかわらず、私の方が

「合格最低点の低い方にしたらどう？」と言い続けていたことです。

それこそ、今日願書を出すという日の朝まで「本当にいいの？封しちゃうよ」と（笑）。今考えると、本人の選択をもう少し早くから後押ししてきていたらと思います。もちろん封を開いた瞬間からは、私も腹をくくって「文Iでいこう！」という気持ちになりましたけど（笑）。

やっぱり上の子の場合は、何事も初めてづくしなので、親の方も慎重になりますね。そういう意味ではかわいそうだったかなと思うところもあります。

今、下の子が高1で、お兄ちゃんの「グノーブルに行け」という一声でこちらにお世話になっているんですが、下の子は上の子とは違うタイプなので、また別の苦労をする

かもしれません（笑）。

**吉田**：そばで見守ることが大切なんだろうと思っていました。本人が本当に勉強しているかどうかは、実際のところは分かりませんでした。図書館で勉強していましたし、自宅では勉強していない姿ばかりが目についてしまい、寝るのもけっこ早かったので。模試の結果もずっとB判定でした。

でも私が比較的大きな気持ちでいられたのは、上の子の経験があったからです。上の子は模試でもいつも上位に名前が載っているくらい成績が良かったにもかかわらず、前期は落ちてしまい、後期で滑り込むというスリリングな結果でした。そうしたことを見ているので、模試の結果というのではなくならないところがあると思っていました。

大事なのは本番にどれだけ気持ちを高めて臨めるかです。結果は最後まで分かりません。「絶対ここに入る」という気持ちを持って受験に向かえることが大切なですから、普段はあまりこちらが動搖することなく、本人のモチベーションを下げてしまわないように心掛けて、励まし続けていました。

## これから受験を迎える皆さんにアドバイスを

**永井**：ちょっと具体的なことになりますが、英語は私立でも国立でも配点が高い科目ですので、グノーブルのGSL（音声教材）を毎日しっかりと聞いて欠かさず復習することが大事だと思います。

また、現役生は最後まで力が伸びるので、途中、いろんな挫折があったとしても決して諦めずに頑張ること。そして親御さんは、そんなお子さんを根気よく支えてあげることが大切だと思います。

**松葉**：GSLは確かに大切です。うちは通学に1時間半かかるので、その間はGSLをやっていたみたいですね。高3のGSLには高速版があって、あれをいつもやっていたおかげで、リスニング本番は、今年はすいぶん速かったらしいのですが、割と楽に聞けたと本人も言っていました。

**永井**：GSLの大切さは、子どもたちの様子を見ていると親にも分かりますね。直前期には特にやっていました。

**吉田**：普段あまり勉強のことは言わないうちの子も「GSLはすごくいい」と言って取り組んでいました。

それから、親としては、子どもの力を信じて、最後まで応援することが大事だと思います。仮に、模試の点数が悪かったとしても、「必ず本番ではできるに違いない」と親が信じてあげることです。親が思わなくて誰が思ってくれるのか、そんな感じです。

**松葉**：吉田さんがおっしゃったことに加えて、グノーブルで学ぶ生徒たちには、「とことん先生を信じましょう」と言いたいと思います。中学生や高校生のうちは、いろんなことを自分で決められなかったり、自分のことを冷静に見ることができないのは当たり前です。グノーブルの方針に従う素直さがしっかり学ぶことにつながると思います。

親御さんも先生を信じて、いろんなことを先生に相談するようお子さんに勧めるべきだと思います。グノーブルの先生方は、必ずそれに応えてくださいますし、そこから学べることは多いと思います。



# 勉強最前线

～いま、教室で～ 高1数学α 1クラス編

この春（2012年）から、グノーブルの先生として中2生と高1生の数学を教え始めた田部井先生。出身の京都大学では、大学院まで数学・数理解析専攻を履修した、数学のオーソリティーである。

実のところ先生ご自身、中学・高校（開成）時代、グノーブルの先生方に、英・数・国を教わっていた、言わばグノ生の先輩だ。

もともと“教育”を職業にしたいという思いが強く、数ある選択肢の中から、かつて受けた指導こそ「最高水準の教育」という思いに至り、そのイズムを受け継ぐべく、卒業とともに、今度は教える立場としてグノーブルに戻ってきたのだという。

今回は、そんな田部井先生の授業にお邪魔させていただいた。

（取材・文 吉村高廣）

## グノーブル数学科、新しいエース登場！

授業開始10分前に先生が教室に入ってくると、教室の空気が、一瞬「キリリ」と引き締まるのを感じた。それはまるで、武道の試合で対戦相手が現れた時の緊張感にも似たものだった。

以前、同じ数学科の縷田（おだ）先生にお話をうかがった折、先生はこんなことをおっしゃっていた。

「中1から中3までは、まず、数学を好きになってもらい土台固めをすることが第一。高1からは大学受験に向けた実戦的な力を養う期間。ここからは、学習内容も俄然高度になりますし、より一層の集中力が求められます」と。

この日の生徒たちは、まさしくその入り口に立った高1生。あの緊張感は、誰もがそれを心得ていて、また、それを引き出す力を持った先生の登場に、瞬時に集中力を研ぎ澄ませた証しだろう。

と、そこで、一人の生徒から質問が挙がった。先生は机を挟んで向かい合い、耳を傾け、そして熱のこもった説明を始めた。

笑顔を絶やすことなく、それでいてきわめてテンポよく的確に行われる解説。先生になってわずか3か月あまりとは思えないほどの明快さだ。それは、授業開始直前の短い時間であったが、グノーブル数学科の新しいエースの実力を予感させる一コマだった。

## 検算の習慣、正確な計算力が基本。

この日（6月22日）の授業は、前回の授業で学んだ『Σの計算』と『階差数列』の確認プリントの演習から始まった。

田部井先生の授業スタイルは、繰り返し学び、習ったことを確実に自分のものにしていくことを重視する。授業参加に先立ってお話をうかがった際、先生

はこんなことを話された。

「高1くらいになると勉強の難度がぐっと上がるため、自宅での復習は欠かせません。授業で行う演習も、最初は必ず前回やった内容をおさらいする意味で確認プリントから入ります。つまり、しっかり復習している生徒はここでつまづくことはないはずなんです」と。

『Σの計算』と『階差数列』の確認プリントは、まさしくそのおさらい。先生の言う「復習」がしっかりできていれば、ここは問題なく通過して次のテーマに入ることができるのはずだったのだが…。

「どうしてこんなに計算間違いが多いのかな？」確認プリントの解説に入ると同時に、先生はそう切り出した。

「いつも言っていますが、検算を疎かにしてはダメです。皆さんよく復習してくれて、公式をイメージすることはできています。でも計算間違いをすれば台無しです。実際の試験でも、計算間違いをして得点できない人が多い。それは、あまりにもつまらない失点です」。

田部井先生のソフトな物腰からは想像できない、きっぱりした口調だった。ここで時間を割いて先生が話したことは「検算する習慣と、正しく計算できる技術が基本」ということ。生徒たちも肝に銘じたに違いない。



スピーディーかつエキサイティングな田部井先生の授業

## 見たこともない問題でも、考え方の糸口を探す姿勢を。

ひき続いているのは、『漸化式』の導入プリント。数列の中でも『漸化式』は難関だ。しかし、大学入試を考えると、ここをマスターすることは必要不可欠である。

一般的には、高1で『漸化式』をマスターするのは難しい。『漸化式の処理、式変形』が理解できずに挫折する人も多く、『数列』を苦手と考える生徒も少なくない。

ところがこのクラスの生徒たちは、プリントが配られたとたん一斉にペンを動かし始めた。とはいってもこれは導入プリントであり、生徒たちは『漸化式』をマスターしているわけではない。先生は、演習中に一人ひとり

の机を覗き込みながら解答を導くヒントを与えていた。

たとえば漸化式という知らない形の式でも『等差・等比・階差数列』がしっかり頭に入っているれば、漸化式の導入に必要な考え方は「必ずイメージできるはず」、それが田部井先生の考える数学だ。

そのことを裏付けるように、演習を終えて解説に入ったとき、先生はこんなことをおっしゃった。

「知らない問題に出会ったときに『これは習ったことがないので分かりません』とあきらめてしまうではなく、まず式の意味するところを具体的に書き下してみましょう。それで考え方の道筋をつかむきっかけが得られるんです」。

つまり田部井先生の授業は、新しいことを学ぶ場合でも、自分が持っている道具を総動員して応用すれば、考え方の糸口は必ず見つかる。そして、そのためには、解答を導き出す公式を丸暗記するのではなく、問われている考え方や意味を読み解く力を養うべし、という論理的かつハイレベルなものである。

## これからの時代に求められる“数学力”。

18時からスタートした授業は、延長も含めて20時20分に終了した。これまでにも、数学科の縷田先生、英語科の中山先生、関田先生、国語科の行村先生と、それぞれに個性あふれる先生方の授業を拝見させていただいてきたが、田部井先生のパフォーマンスもまた、とてもルーキーとは思えないエキサイティングなものであった。

スピード感があつて明瞭で、明るさの中にも緊張感がある。そして何より、数学という学問に精通した田部井先生の引き出しの多さは、「理解を深めて数学得意にしたい」という生徒たちには福音になるだろうし、「もっと高度で、考えがいのある問題に挑戦したい！」という生徒たちには、大きな魅力になることは間違いないだろう。

これまで、英語こそが社会で求められる必須能力と言われてきたが、すでにそれが現実のものとなった今、これから注目される力は、理系・文系を問わず「数学力である」と田部井先生は考えている。

物事を論理的に考える力、数字やデータから状況を読み解き展開を予想する力、イノベーションにつながる発想の種となる直感力は、数学を通してこそ磨かれしていくのだと。

先生は今後、数学科の先生方と力を合わせて、グノーブル独自の、新しい時代の指導メソッドの開発にも力を注いでいきたいと言う。

知識を道具に、発想の武器に！

田部井 希一  
たべい きいち  
(数学科)

# ティーチャーズ・ボイス Teachers' VOICE



道具(文法)を磨く。たくさん書く。添削を受ける。  
グノーブルを利用して英語の発信力を高めてほしい。

本原 昭彦  
もとはら あきひこ  
(英語科)

文法力を鍛えよ。  
文法は英語に触れる上での  
「道具」である。

文法と読解を「異なるもの」とする見方がありますが、その解釈は違います。グノーブルでは英文を読む場合、前から意味をとっていく読み方を指導していますが、それは「前から意味のかたまりごとに区切っていく」ということであり、それを可能にしているは文法の知識に他ならないのです。

文法に苦手意識を持つ人の中には、文法用語にアレルギーを起こす人が少なくありません。たとえば、「複合関係代名詞」や「独立分詞構文」のような言葉を見て、文法は難しい、文法は嫌いだ、と思っているようです。けれども、文法力というのは英文をかたまりごとに区切って読む力のことであり、文法用語をどれだけ知っているかということとは無関係なのです。

また文法力とは「文法問題」を解く力（したがって英文を読む力とは別物）と考える人もいますが、これも正しくありません。空所補充や正誤問題など、いわゆる文法問題を解くのには文法力が要求されますし、また、文法問題が文法力を養う有効な手段の一つとなるのも事実です。しかし、グノーブルの考える文法力とは、なによりも英文をかたまりごとに区切るということに直結するもの、いわば英文を読むための「道具」なのです。したがって、一通りの文法事項を習得したら、その道具としての文法知識を使って英文を読む練習を重ねる。その過程で文法という道具の使い方により習熟し、あるいは新たな道具の使い方を習得する。そこで得たことが次の英文を読むときにより強力な道具となる。また適度な割合で文法問題を演習することで現時点での文法力を測り、補正していく。このような形で文法力を発展させるのが理想と考えます。

文法の原理は単純である。  
複雑な文章も単純な要素に  
還元できる。

文法用語は複雑ですが、文法そのものの原理は単純です。たとえば英文を構成する「かたまり」の正体は「名詞句」（例my bicycle）、「形容詞句」（例very clever）、「動詞句」（例can fly）、「前置詞句」（例under the table）のどれか、またはそれらの組み合わせです。種々の文法規則も、少数の基本要素とその組み合わせとして捉えることができます。実際には「組み合わせ」の結果複雑になったりもするのですが、そういう複雑なものも単純なものに還元されるという視点で我々は指導をします。

たとえば「その問題は私の予想よりも簡単だった」をThe question was easier than my expectation. としてはいけないということを理解していない生徒は少なくありません。けれども、そのような生徒も、英語の比較は対等の語句の間で行うことは理解しています（「東京の人口は大阪より大きい」はThe population of Tokyo is larger than that of Osaka [×… than Osaka]. となる）、また、比較が動詞の間で行われることがあることも経験的に知っています（He is older than he looks. ではis（…だ）とlooks（…に見える）という動詞の間で「実際」と「外見」の比較が行われている）。このあたりを丁寧に説明すれば、最初の英文はthe questionとmy expectationという次元の異なる名詞句の比較ではなく、The question was easier than I had expected [< I had expected it to be]. (~ was 「～は…だった」と had expected ~ to be 「～は…だと私は予想した」の対比）のように動詞部分の比較として表すのが適切であるということを理解してもらえるのです。

日本語に影響を受ける英作文、  
そこに添削の意義がある。

先ほどから、英文をかたまりごとに区切る力が文法力だと言っていますが、同じことを逆に行うのが英作文や会話などの発信型英語です。つまり、英語のルールに従ってかたまりを作り、それらのかたまりをつなぎで文を組み立て、情報を発信するのです。

読解がしっかりできる人、つまり、つねにかたまりごとに英文を区切って読み、それぞれのかたまりを正確に解釈している人は、文法力がしっかり身についているはずです。したがって読解ができる人は、しっかりとした英文を書く力がある、ということができます。

もちろん、「読む」と「書く」は正反対の行為でもあります。いかに読解力があるとはいっても、練習もなしにすらすら英文が書けるということにはなりません。読解や文法問題を通じて得た文法力そして語彙という道具を、今度は別の方法で使おうとしているわけですから、実際に手を動かして多くの文を書き、そして添削などを通じて自分の書いたものの妥当性を判断してもらう、という訓練が必要になります。



ところで、生徒たちの書く英文を見ていて実感することですが、我々の母語である日本語の影響というのはなかなか大きいものです。日本語を英語に訳す問題ではない自由英作文であっても、日本語に影響されたと思われる答案は少なくありません。たとえば、「結論を先に述べる」が英文の大原則なのですが、答案には、それとちょうど逆の「周辺的な状況説明から始めて、最後に結論を述べる」という日本語的な展開の文章になっているものがかなり見られます。文法・語彙についても、たとえば文章を書きながら「つまり」という日本語が思い浮かんだのでしょうか、In shortというフレーズを使っているのですが、本来「短くすると」という意味のこのフレーズの後に、その前に書かれていたのより、かなり長めの言い換えの文が続いているたりするのです。これなどは、日本語に影響を受けているというだけでなく、本人たちの頭の中に「つまり」=in short という単純化しそうな対応関係ができてしまっているということも示唆しています。in shortのshortが「短い」という意味であることが全く見えていなかいのようなのです。

このように我々は日本語の影響を受けた英文を書きがちであり、その分だけ添削の意義は大きくなるので

す。グノーブルでは、単なるスペリングや文法の間違いの指摘は言うまでもなく、そもそも意味をなす英文かどうか、論理的に矛盾していないか、英語の文章として受け入れられる構成になっているのか、などにまで踏み込んだ添削指導を行っています。

私個人、添削するときには、「よく考えながら書いているか」という点をチェックしています。たとえば、「日本の文化と西洋の文化は、調和と対立の原理に根差すものとして対比されることが多い」という文章を英訳させたことがあります。すると、Japanese culture and Western culture are often contrasted in that they are rooted in the principle of harmony and opposition のように、「調和と対立の原理」をまとめて書く生徒が多く見られました。よく考えれば、「調和と対立」という1つの原理というのは意味をなしにくいし、またこのあとに続く具体例などから判断すれば、the former is rooted in the principle of harmony and the latter in that of opposition 「日本の文化は調和の原理に根差し、西洋の文化は対立に根差す」と解釈すべきなのは明らかなのですが、多くの答案がそうはなっていないのです。つまり、与えられた日本語を表面的にしか読んでおらず、また英語を書くことに夢中になって何を書いているのかという中身の方が疎かになっているのです。

返ってきた答案の添削を見ながら、  
常に自己検証しているか。



添削で答案が真っ赤になる生徒がいます。指摘されれば気づくのですが、「道具=文法」の部分が弱く、とにかく間違いが多いのです。練習不足、そして復習不足と言わざるをえません。

この点、伸びる生徒は復習する習慣が身についています。しかも、単に作業として問題を解き直すのではなく、「なぜ間違ったのか」という原因をしっかり考えながら復習しています。そのような自己分析を行いながら復習することで間違いが少なくなっていくのです。

生徒たちには、添削が戻ってきた時に復習するだけでなく、間をおいてもう一度やってごらんと言っています。解説を聞いた直後には、できなかった問題がすらすら書けることが少なくありませんが、二週間後にはまたできなくなっていたりするのです。自分の理解度を繰り返し検証し、理解の不十分なところはしっかりと見直し、補強する。そういう地道な復習を通して確実な学力が築かれていきます。



